

---

# IS CREED

グリペン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS C REED

### 【Zコード】

Z4504Y

### 【作者名】

グリペン

### 【あらすじ】

古から続くアサシンとテンブル騎士団による世界の裏側での闘い。  
人類を支配しようと目論むテンブル騎士団の強大な力は、ISが普及した現代においても衰える事はなく、人々と世界を手にする準備を整えていた。  
そんな中、そんな野望を阻止すべく暗躍する一人の少年がいた。白い装束を纏い、フードからのぞく鷹の目で彼は何を見るのか?  
女尊男卑となつたこの世界で、彼は自分の使命を果たすために奮闘する。全ては世界の安全と平和のために。  
真理は存在せず、許されぬ行為もない。  
小説を書くの

は初めてですが、よろしくお願ひします。

## プロローグ

インフィニット・ストラトス……通称”IS”。それは世界を震撼させるほどの性能を持つていた。

いかなる環境にも耐えうる、宇宙進出用のマルチフォーム・スーツとしてそれは製作されたはずだった……。

だがそれとは裏腹に、世界はこれらを兵器として使用した。既存の兵器をも上回る攻撃力と機動性……、操縦者の生存率を飛躍的に上昇させる絶対防御……、そして過去に起こったある事件……。それらはISを兵器として転用するには十分すぎる説得力を持っていた。

これだけ聞けば、ほとんどの人間はこの”力”を手に入れたいと思うだろう。しかしこの兵器にもいくつか弱点はある。

何故か女性にしか扱えず、そしてISの心臓部であるコアが467個しかないものである。

そして皮肉にもこの弱点がこれまでの社会の在り方を崩壊させ、数の限られたISに乗れる女性が偉いという歪んだ女尊男卑という世界を作り上げたのだった……。

これをISの製作者である篠ノ之束が意図したものかどうかは分からぬ。だがその答えを聞こうにも、彼女はある口を境に謎の失踪を遂げてしまった。そして現時点ではISのコアの製作法を知っているのは彼女だけである。

つまりコアがこれ以上増えることはありえない。

そこで世界はアラスカ条約を締結してコアを各国で分配、保有することとで軍事バランスを保つことにした。

つまりは IIS を複数保有し、なおかつ性能の良いものができれば、あらゆる面で他国より優位に立てるという事を意味する。

これは表の世界の話である。いかに IIS を複数所持していようと、いかに性能の良い IIS を開発したとしても、それらが世界を制するための手段になりえない。何故ならばそれは単なる武力行使のための”力”でしかないのだから……。

だが仮に世界を手に入れるほどの絶対的な”力”が存在すればどうだろう……？

その”力”が人々の心をも魅了し、支配できるほどの物とすれば……。

そしてそれが今あなたの目の前にあるとすれば……どうするだろうか？

悪用されないように破壊する？それとも自分の欲望を満たすために使用する？

それは私にも分からぬ。答えをだすのはあなた自身なのだから……。

だがひとつ言えるのは、絶対的な”力”を持つこの秘宝”エデンの果実”をもつてすれば、IIS という兵器など無きに等しく、女尊男非などという世界など容易に壊せるということだ。

表で騒がれている IIS など比較にならないほどの価値が、その秘

宝には詰まっているのだ……。

もうひとつだけ言えることがある。それはこの秘宝をめぐつて、はるか昔から闘いが続いているということだ。

世界の裏側では、人々を支配することで新世界を築こうとする勢力が存在していた。

彼らはその野望を成就せんと、多くの人々を苦しめ、騙し、陥れてきた。逆らうものは容赦なく殺してだ。

だがそれを阻止するための勢力も存在していた。私利私欲にまみれた人間を断罪し、人々の畏怖と敬意の狭間で生きた彼ら……。そんな彼らはアサシンと呼ばれ、影に潜んで悪を討つまさに暗殺者たる集団だった。

彼らが求めるものは只ひとつ、人々の安全と平和である。そのためには戦い、その数を減らしながらも野望を阻止していく。

その戦いはかつて十字軍とイスラム軍が聖地をめぐつて争つている間や、その数百年後のルネサンスの真っ只中にも行われていた。これらの戦いはいずれも私の先祖達の活躍によつて勝利を収めてきた。だがこの戦いはまだ終わつてはいないのだ……。

この秘宝をめぐる戦いは、EU中心の今の世界においても始まるうとしている。

だが今やアサシンはその数を減らし、秘宝の在処も分からぬ……。しかも敵の勢力は世界に影響力のある企業を隠れ蓑に、私の同胞と秘宝探しに執念を燃やしている。

この状況下から生き残り、今こうして筆を取れるのも、ひとえに

私の仲間のおかげである。

だから後々の安全と平和のために、この戦い……つまり私の戦いの全てを記録しておきたいと思う。

これを読んでもあなたがどう思おうと自由だ。何故ならこれは私の物語であり、あなたはその読み手にすぎないのだから……。  
だが忘れないで欲しい。この物語を読んで、感じたこと、考えたことを……。  
願わくば、それがあなたの安全と平和につながることを祈つて……

Nothing is true, Everything is  
permitted.

20XX年 12月22日 XX XXX

## プロローグ（後書き）

いかがでしたでしょうか？創作活動は初めてで至らない点もあるかと思いますが、これからよろしくお願いします。

## 第一話 ある朝の光景（前書き）

ここからが本編です。

## 第一話 ある朝の光景

IS学園。今や世界になくてはならないIS操縦者を養成する教育機関である。ISの原産国である日本にそれはあり、世界各国から集まつた生徒達が、ここで三年間<sup>12</sup>を磨き、青春を謳歌することとなる。

だが全ての人間がその権利を得られるところ<sup>13</sup>とではない。

ISの適正値が一定水準以上でなおかつ、難度の高い入学試験を突破する必要がある。

そして前提として女性であるといふことである。

これはISに乗れるのは女性だけなので当然だし、覆ることもない事実だ。

だが何事にも例外は存在する。そしてそれはISにもいえることである。

そう……ISに乗れる男性が現れたのである。

これは今までに前例がないことであり、世間は騒然となつたのだ。世界中がその人物を手に入れようと行動を起こし、そのためには手段を選ばない輩も出てきた。

そのために急遽日本によつて保護され、今年のIS学園に入学せられることとなつたのだ。そして……

「そしてこれがその男子の資料ね……」

IS学園生徒会室。そこで紅茶を飲みながら入学してくる男子の資料を見ているのは、生徒会長である更識樅無である。

容姿端麗で文武両道、学園の生徒の中で最強の腕を持つ彼女が、朝

早くから資料に目を通しているのにほんの理由がある。

ひとつは入学していくのが男性であること。その希少性から、狙われることが多く、身柄の安全を確保することが最優先である。生徒会長として生徒の安全を守る事は義務であり、その生徒の情報を把握しておくのは当然のことであった。

そして生徒会長としてではなく、個人として興味をそそられる事実があるというのが一つ目の理由である。

「ふうん、彼はあのブリュンヒルデの弟か……。そんな彼がＩＳを使えるなんて……何かあるのかしら？」

楯無がおもしろそうにつぶやく。ブリュンヒルデといえばISの世界大会であるモンド・グロッソの優勝者に与えられる最強の称号である。その弟がISを世界で初の男性操縦者となつた。この事実は楯無個人としても非常に関心が持てた。

元より女性しか使えないという概念を壊したということもあるし、報告によるとあの篠ノ之束とも交流を持っていたこともあるらしい。もしかしたらそれがE-Sを動かせる原因かもしれない。あるいは他の理由があるのか……。

考えれば考えるほど興味が尽きないことはなかつた。

楯無は顔に笑みを浮かべつつ資料を読み通していく。

そしてあるページでその手を止める。

「まあ私としては、この方が重要なんだけど……。もしこれが本当だつたら……」

た、たら……」

お嬢様、そろそろお時間です」

「ん……もうそんな時間が、ハイハイ今行きますよ~」

生徒会役員である布仏虛に呼ばれ、樋無はこれから始まる入学式へ出席するために席を立つ。

彼女には生徒会長として、全校生徒の前で挨拶するところ今学期初めての仕事が待っている。

「それで、接触は何時なるおつもりですか？」

身だしなみを整えながら虚とともに廊下を歩いていると、不意に彼女が話しかけた。

「そうね……、早くとも今日の放課後には会いたいかな……。でも、

入学式でウインクして悩殺つてのもアリね」

「そうですか……、あまりやりすぎないでくださいね……特に彼には」

楽しそうに答える彼女に呆れつつも、虚は忠告する。樋無がふざけるのはいつものことだし、別段気にすることもなかつた。

だが今回は相手が相手だ。慎重にことを進めないといけない。ここで手段を間違えば、後々面倒なことになる。

それは樋無にも虚にも分かりきったことであった。何故なら……

「分かつてるって。何せ”もう一人の彼”はアサシンかも知れないんだから……。今年からは退屈せずに済みそうね」

樋無は口元の笑みを隠すようにセンスを広げる。

それはこれからのお会いに思いを馳せてのことなのか。

それとも別の思惑があるからなのかは虚にも分からなかつた。

誰もいなくなつた生徒会室。そこには彼女の読みかけの資料が置かれていた。開かれたページには”もう一人の彼”のことが書かれていた。

幼きころから篠ノ乃家、織斑姉弟と親交関係にあり、義理の姉と生活していた。

身のこなしにアサシンの兆候が見られる。

また去年から消息不明となつており、田撃証言によればイスラエルやイタリアにいた可能性がある。

・・・・・

以上のことから彼は少なくともアサシンの関係者であり、”エデンの果実”を所持、

あるいは情報を持っている可能性は大いにありつる。注意されたし。

## 第一話 新たな一步

入学式が終わり、全校生徒はそれぞれの教室へ戻つてSHRを受けている。そしてそれは1年1組も例外ではなかつた。

今は担任の教師がいないということで、副担任が自ら紹介をしている最中だ。

年上にしては子供っぽい（だが胸は自己主張しそうでいる）山田真耶の話を聞きながら、彼は考え方をしていた。

（何故俺はここにいるんだらうか……？）

思えば自分がここIIS学園に入学することなど夢にも思わなかつた。自分が何者なのかを知り、来るべき時のために一年間世界を見てきた。

だが得られたのものはあまりにも少ない…。一応痕跡を残さないよう行動してきたつもりだったが、危険を犯してきたことに変わりはない。自分の正体はまだ知られるべきではないのだから……。

しかしその旅の途中に同行者が突然言い出したのだ。

「突然だけど君にはIIS学園に入学してもらいま～す。ブイブイ

」

ピースをしながら朗らかな笑みを浮かべる彼女に、始めはいつも悪ふざけが始まつたのか？と思つた。

しかしIISコアに触れさせられ、自分がIISを起動できると分かつてしまつてからは、拒否する間もなく二ンジン型の悪趣味なロケットに無理やり押し込まれ、気が付いたら自分の家の前にいた。

姉は一年間消えていた自分が突然帰つてきたものだからびっくり

していたが、いつもどおりに接してくれた。

それからは姉とよく話し合つてある決意をした後、男なのにEISを動かせるようになった親友とともにこの学園に通学し、今に至る。

そんな事を考えつつ彼は意識を戻す。何故自分にEISが動かせるのかは分からないが、今はこの学園生活を大事にしよう。自分が戦えるようになるまでには、まだ知識も経験も足りない。ならばせててこの学園生活で己を磨こう。

そう決めた事を思い出し、改めてまわりを見てみると、クラス中の女子がこちらを注視していた。

クラスに一人もEISが動かせる男子がいるのだから当然だといえた。

（さすがに入学式で生徒会長にいきなりウインクされたのには驚いたが……）

しかし特に気になつたのは窓際の席と後ろ側の席からの視線だ。

窓際には、忘れるはずもない幼馴染がいた。髪をリボンで結び、凛々しい顔付きをした少女。見た瞬間彼女だと分かつたが、目を合わせた瞬間、顔を紅くして目をそらされてしまった。

（彼女は昔から恥かしがり屋だったからな……）

後ろ側には、気の強そうなブロンドの髪の少女がいた。どことなく貴族の気品が漂う彼女の視線は、興味以上に敵意が感じられた。彼の今までの人生で彼女に会つたことはないし、恨みを買つような真似もしていないはずだ。しかし自分が男だと考えれば納得がいく。（悲しいことに今の女尊男卑の世の中では、女性が男性を見下すのも珍しくないからな。だがそれ以上にあの感情は……）

そう考へている間にもSHRは生徒の自己紹介に進んでおり、今

は自分の隣に座る親友……、織斑一夏の番となつている。

だが何か様子がおかしい。副担任である真耶の呼びかけにも全く応じず、別のこと気にしているようだ。半泣きになりながら必死に頭を下げている彼女を見て、ようやく気づいた一夏は彼女を宥めつつ席を立つ。

（あれはかなり緊張しているな……。まあ俺でもきついがな……）

何せ今まで一人の男子に分散していた視線が一斉に、集中するのだからたまつものではないだろう。見ると一夏は誰かに助けを求めるように視線をしどろもどろさせていた。

さすがに見ていられなくなり、一夏と視線が合いつのと同時に軽くうなずいてやる。

（大丈夫、お前ならできるぞ。友よ）

それを見て一夏は落ち着きを取り戻したのか、うなずき返すと背筋を正し、自己紹介を始める。

その誰が見てもかつこいいと感じるほど整った顔には自身が満ち溢れ、それを見たクラスの女子の顔は紅くなっているように見える。これは期待できるかもしねり。だが現実は甘くはなかつた。

「織斑一夏です！　・　・　・　ようしくお願ひします！　・　・　・　以上です！」

『えええええ――――――』

その瞬間クラスの女子の一部が盛大にずつこけた。

威勢がいいのは高評価だが、いくらなんでも自己紹介で名前だけというのはまずい。

特にたつた今入ってきた彼女に聞かれるのは……

パン！！！

「お前は満足に自己紹介もできんのか？」

「げえつ、関羽！？」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

そういうって教室に入ってきた、一夏の頭を出席簿で叩いたのは、自分も良く知る人物だ。

彼女は真耶に会議で遅れた非礼を説びると、その凜とした表情を生徒に向け自己紹介を始める。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。いいな」

それを聞いた瞬間、まわりの女子が一斉に歓声を上げる。だがそれも当然のことだらう。

彼女、織斑千冬はISの世界大会モンド・グロッソの一回目の優勝者であり、歴代IS操縦者の中でも最強といわれている。その圧倒的な強さと美しさは人々を魅了し、まさにブリュンヒルデの名にふさわしい存在となっている。

そして彼女は自分の恩人である。かつて自らの在り方に悩んでいたのを助けてくれたのは、他ならない彼女だった。

それらの事を含め、自分は彼女のことと純粋に尊敬していた。武人としても人間としても、彼女のようにありたいと思つていた。

（口ではああいつ乱暴なことを言つけど、面倒見もよくて頼れりい人だよな……。だから俺は今も……）

パン！――！

「ぬおつ！？」

だがその思考は彼女の一撃によつて中断させられた。彼女の主席簿は、彼といえども避けられるものではないのだ。

「今失礼な事を考えなかつたか？」

「逆ですよ、逆！？ むしろあなたの事をずっと想つていました」

叩かれた頭をさすりながら、自分は思つたままのことを口にした。本当のことを包み隠さず話したほうが身のためになると判断したためである。

昔から彼女につく嘘は何故かすぐバレるし、嘘をついてまた叩かれるのも可能ならば避けたかつたのだ。だがそれがいけなかつたのか、何故かまわりの空気が凍つてしまつた。一夏に至つては、またかといった呆れた表情をしている。

しかも一部の女子がわなわなと震えていたり、頬を紅く染めているのはどういうことなのだろうか？

真耶にいたつては顔がゆでダコのようになり、入学初日から教師と生徒の禁断の関係なんて……などとつぶやいている。

千冬も一瞬呆然としていたが、すぐに復活し自分にするどい視線を向ける。若干照れているのは氣のせいだらうか？

「ほお……生徒風情が教師を口説くとはいひ度胸じやないか？」

「まさか……そんなこと恐れ多くてできませんよ。尊敬しているの

は事実ですが……」

「そうだろうな……。お前がそつのはいつものことだからな。もう何も言わん」

何がいつものことなのか自分には分からないうが、千冬もこのままでは埒が明かないと思ったのか、自己紹介を続けさせる。

何にせよ理不尽な追求から逃れられたのは、運が良かつた。そう気持ちを切り替え、クラスメイト達の顔を覚えていく。交友関係が今後どうなるかは分からないうが、悪くしたくないと考えていた。

そう考えている間にも自己紹介は進んでいき、とうとう彼の番が回ってきた。

先ほどよりも女子の視線が突き刺さつてくる。良くも悪くも先ほどの発言が誤解を招いてしまったのが原因だらうか？

だが背に腹は変えられない。一夏は先ほど自分がしたようにガッツポーズで励ましてくれたし、千冬もやってみせると田配せしている。

「それでは自己紹介をお願いしますね」

「はい」

真耶に呼びかけられて彼は返事をして立つ。

自分も、そして世界もどうなつていいくかは分からない。だからせめて今はいい学園生活を送れるように頑張ろう。

そんな決意を胸に秘め、彼は口を開く。これからのお安全と平和を願つて……

「四条カムイです。みなさんは俺が男なのにエスに乗れる特別な存在だと認識していると思います。ですが俺はそうは思いません。なぜならエスに只乗れるだけで優れているとはいえないからです。大

事なのは I-S を扱えることではなく、その知識や技術で何ができるかだと思います。その答えを探すため、みなさんとこれから切磋琢磨していきたいと思います。一人しかいない男なので、みなさんに迷惑を掛けるかもしませんが、親友の一夏ともどもよろしくお願ひします！」

そういうてカムイは頭を下げた。だが教室はまたも静まり返ってしまった。今の発言に嘘偽りはない。きちんと考えた上での発言だ。いくら女性中心の社会だからといって、無条件で偉いというわけではない。だから言いたい事ははつきり言つ。聞き様によつては、I-S に乗れるだけで偉いと思つてゐる女性を馬鹿にする発言とも受け取られかねない。今の女尊男非の世界を真つ向から否定する発言は、何人かの女性を敵に回すことになるだろつ。だがこの現実を認識してもらわなければ、これから学園生活はうまくいかないだろつとカムイは考えていた。

そして沈黙を破つたのは、敵意ではなく敬意のこもつた拍手だつた。そしてそれはやがて大きくなり（全員ではないが）彼を祝福したのだつた。

「きや～素敵！」

「す～い～！ 今時の女性にあそこまで言つなんて普通じゃ できないよ～」

「イケメンです～」つてかつこい～……。嫌いじゃないわ！」

「これからもよろしくねカムイ君。一緒にがんばるつ」

その後 S-H-R はチャイムによつて終わりを告げ、彼らの日常が始まっていくのだつた……。

「しかし一時はどうなることかと思つたが案外うまくいくもんだな」「ど」がだ友よ。むしろお互ひ大火爆だつただろう……」

一時間の授業が終わり、安堵の息をついている一夏をカムイが軽く諫める。

授業 자체は滞りなく終わった。T.S学園に入学が決まってから一人で猛勉強し、何とか初步的な知識だけはモノにしたのだ。カムイとしても、マスコミが蔓延る織斑家に気づかれずに入れるのはいい特訓になつた。

「……まあな。でもお前がいきなり千冬姉に告白した時は流石に驚いたぞ」

「確かに俺の言い方が悪いかもしねりが、あれは……」

「分かつてゐるよ。でもお前ももう少し自分の容姿を自覚しろよな。初対面の奴じや絶対勘違いするぞ」

今度は一夏がカムイを諫める。一夏も彼とは長い付き合いだから分かつてゐる。カムイは昔から良くも悪くも正直すぎるのだ。そのためには、口説き文句のような言葉も女性に對して無意識に発してしまうことがある。それに自覚していないだろうが、カムイの容姿は他の同姓と比べても比較的整つてゐる。特に彼のやさしさを体現しているかのような笑顔は、過去にカムイと関わってきた親しい女性を虜にしている。

過去に一夏はカムイにそう言ったのだが、それはお前だとカムイに返されたときは何を言つてゐるのか理解できなかつた。

「まあ何にせよ同姓が、しかも友が近くにいることがこんなに心強いとはな……」

「全くだ。カムイがいてくれてホントによかつたぜ……」

そういうて二人は教室を見渡す。そこにはクラスメイトによる包囲網が完成していた。

正確に言えば誰が話しかけるべきか互いにけん制し合い、そのような殺伐な雰囲気となつてしまつてているのだが……

いかに修行を積んだカムイや鈍感な一夏でも、これだけの好奇の視線に晒されれば多少萎縮してしまうのも仕方ない。

そんな状況の中、窓際の席から歩いてくる女子生徒がいた。大和撫子を表現したかのような、日本人らしい美しさを身に纏い、ポニーテールを揺らしながら彼女は一人の男子に近づいていく。そして

……

「……ちょっとといいか」

「……え？」

「……久しぶりだな。……第」

一夏は呆けた顔をしていたが、カムイは話しかけてきた彼女との再会を喜び、言葉を返す。

それがカムイと、これから長い付き合いとなる篠ノ之箒との再会だった……

## 第一話 新たな一步（後書き）

やつとオリ主が出てきました。改行や人物の視点など、実際に書くとなるとやはり難しいものですね……

## 第三話 剣道少女と貴族少女（前書き）

今回は無駄に長くなってしまった……

## 第三話 剣道少女と貴族少女

IS学園屋上。緑が生い茂り、景観のいいこの場所に男女三人が集まっていた。

織斑一夏、四条カムイ、そして篠ノ之箒……

初めは廊下で話そうとしていたのだが、あまりにも野次馬が多いため、屋上で話すことになった。しかし授業の合間の休み時間のため、恐らく挨拶程度で終わってしまうだろう。だが例え短い間でも、この会合にはそれだけの価値があるカムイは感じていた。

小学1年のころに知り合い、それからずつと交友関係を築いてきた。ともに学び、鍛え、遊んだ日々は今でもはつきりと覚えている。だが小学4年のころ、ある理由により箒とは離れ離れとなってしまったのだ。しかしどんなに長い年月が経とうとも、カムイが彼女を忘れるはずがなかった。

昔は寡黙で、建物のてっぺんに登る等の数々の奇行により友達がいなかつたカムイにとって、一夏や箒はかけがえのない友人達なのだ。

（そりいえば俺が自分の正体を知ったのもあの時か……。だからあの人は……）

「その……久しぶりだなカムイ」  
「ん？」

思考の海に沈みそうになつたカムイに箒が声を掛ける。だが教室の時とは違つて照れているのか、顔をそらしており頬も紅い。

だがそれはカムイも同じだ。六年ぶりにあつた彼女は、昔の幼い面影を残しつつも女性としての魅力を醸し出していたのだから……。カムイもそんな彼女の姿に緊張しつつ、自分の気持ちを言葉を紡ぐ。

「ああそうだな。何ていうか……綺麗になつたな、篠」  
「な、何を言い出すんだお前は！？ いきなり綺麗などと……」「いや……俺は本心を言つたまで……」  
「ふえつ！？ ・・・お、お前つ！ 先ほどの織斑先生の時といい、デリカシーが欠けてるんじゃないのか！？」

篠は先ほどよりも頬を紅くしつつ、声を荒げる。だがこれは嫌悪からではなく、羞恥から来ているものだ。

しかしこれでは久しづびりの再会どころではない。昔とは違うカムイに篠は戸惑つていたが、やがて落ち着きを取り戻す。

「……確かに、一夏に言つ通りだつたな」「だから言つただろ。俺は昔も今もカムイのままだと思つけどな」

何かを思い出したのか、どこか納得した様子の篠に、先ほどから空氣だつた一夏が答える。それをカムイは訝しげな表情で見つめていた。

だがカムイには一夏の言葉は不快ではなく、むしろ今の自分の存在が認められているようで嬉しかつた。

「そついえば一夏は篠と去年会つていたんだよな？」  
「おう。剣道の全国大会は男女とも同じ日に行われていたしな」  
「そうだな。私と一夏もその時に再会できた。お前のことも聞いていたぞ」「

だがそんなカムイも二人の偉業を思い出すと改めて一人に問い合わせた。筈の実家は剣道の道場であり、よく三人で稽古を積んでいたのだ。

筈は途中で引っ越してしまい、カムイもそれを機に剣道をやめてしまった（最も彼には別にやることがあつたからなのが……）。しかし筈と一夏はそれぞれ地道に鍛錬を続け、ついには大会で優勝するまでになつたのだ。

「それに筈……」

「な……、何だ」

何かを言いたそうなカムイに筈は思わず身構える。昔とは違い、今の彼はどんな事をしてくるか分からないからだ。また慌てた姿を晒したくない筈は警戒していたのだが、次の一言で彼女の警戒網は一瞬で突破されてしまう。

「一夏にはもう言つたんだが……、これまで色々あつたと思つがよく頑張つた。本当におめでとう」

「あつ……」

その労いの言葉を聞いた瞬間、筈の中で今まで詰まつていた想いが噴出しそうになつた。半ば強引にIJS学園に入学させられ、もう一度と会えないと思っていたカムイに会えただけでなく、こうして健闘を称えてもらつていてる。

そしてその言葉は他の誰のものよりもうれしく感じられたのだ。この世に神がいるのならば、筈は思わず拝まずにはいられなかつた。

何故なら彼女にとつてのカムイは……

## キーイングーンカーンゴーン

だがここで幸か不幸か、授業開始のチャイムが鳴つてしまつ。それを聞いた三人は一斉に慌てだす。

「まあいい、早くしないと千冬姉に殺されるつー? 早く戻らないとー!」

「もう遅いだる……。まあ時間を忘れるほど嬉しい思いができるんだ。もう悔いはないわ……」

「何言つてんだよカムイー? ほら、篠も早く行くぞー!」

「あ、ああ

若干顔が青ざめている一夏が、逝く覚悟を決めたカムイと慌てている篠を急かし、駆け足で教室へと戻る。

（あそこ）でもしチャイムが鳴つていなかつたのなら、私はどうしたのだろうか……）

篠は走りながら考える。積年の想いを勢いで告げていたのだろうか? それともまた恥かしさのあまり彼を突つぱねていたのだろうか? 今となつては分からぬが、そんな事は些細なことだ。何故ならこれからカムイと過ごす時間はいくらでもあるのだから……

これから彼と過ごす学園生活に想いを馳せながら、彼女は自然と笑みを浮かべる。

（今度こそ私は逃げない……。カムイに私の想いを伝えて、それから……）

「ほう……、そんなに私に叩かれるのがうれしいか。ならば望みどおりにしてやるぞ篠ノ之」

スパパパパアアン！――！

いつの間にか戻っていた教室で、篠は千冬に出席簿による手厚い洗礼を受けたのだった。

「お前のせいだ！」

「何故そつなるんだ？」

結局遅刻してしまった一時間目の授業が終わり、カムイは篠と窓際で話をしていた。恐らく先ほど出席簿による脳細胞暗殺のことを言つてこらのだらう。

カムイとしては思い切り叩かれて涙目になっている篠の姿に、女子特有の可愛さを感じていたのだが、話がこじれるので言わないでおく。

「それにしてもやはり一週間での内容を覚えるのはキツすぎたか……」

「む……。だがお前は答えられていたじゃないか？」

「偶然だよ。あれは単に一夏の運が悪かつただけだ。」

カムイの急な話題転換に納得のいかない筈だつたが、そのまま話を続けていても埒が明かないと思つたのか、その話題に食いつく。それというのも、先ほどの授業で副担任の山田真耶にいくつか授業に関する質問をされ、一夏はそれに答えられなかつたのだ。

確かに彼らがISに乗れるのが判明したのは数週間前であり、膨大な量の教科書を内容を覚えるのには時間が足りなかつたということはある。だがカムイも一夏も、それなりの覚悟を持つてIS学園に入学している。それを理由に妥協する気は更々なかつた。一夏が自分の席で分からなかつたところを復習しているのが何よりの証拠だ。千冬にもその覚悟が伝わっているのか、授業中に何も言われることはなかつた。

「それに一夏は今日の放課後には山田先生と一人きりで補習だからな。まあ大丈夫だろう」

しかし真耶が一夏を励ましたまではいいが、補習を頼まれた際のあのうろたえようは半端なかつた。  
もし千冬がフォローしていなければ半永久的にトリップしていくことだろう。早く男に慣れてくれる事を祈るばかりだ。

「……もしや一夏がうらやましいのではあるまいな？」  
「何だつて？ 確かに山田先生は優しく教えてくれそうだが……」

そんな事を考へていると不意に筈が恨めしそうにしぶぶやいた。カムイにはその発言の意図が分からなかつたが、それが嫉妬のように感じられた。

久しぶりに会った友人が、自分ではなく今日初めて出会った人間のことを考えているのが気に入らないのだろうか……？

カムイにはその嫉妬心の理由が分からず、いや分からうとしたかたのかもしないが、とりあえずフォローしておくことにした。

「確かに補習が受けられる一夏はうらやましいよ。でも山田先生に迷惑が掛かるかもしないし、今日のところはお前に聞いてもいいか？」

「えつ……あ、ま、まかせておけ……！ 私が教えるからには泥

舟に乗つたつもりでいるがいい……！」

「……よろしく頼む。できれば沈まない舟に乗せて欲しいんだがな」

カムイの要求に始めは鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をしていた筈だったが、自分を頼りにされたのが嬉しかったのか、急に立ち上がり力強く宣言する。

その気持ちの昂りによつて、大船を泥舟と間違えたのだろうか？ それほど筈が舞い上がつてゐるが、目に見えて分かる。

泥舟に乗せられるのは勘弁願いたいが、筈のうれしそうな表情を見てカムイも表情を和らげる。

はたから見れば友人として以上のやり取りに感じられるその光景に、クラスメイトは羨望の眼差しを向けるのだった……。リア充爆発しろ。

しかしそれらの視線は羨望だけではない。教室の後ろの席からは、彼らや一夏をまるで品定めするかのような視線が向けられていた。

「……」

「……筈。金髪の彼女のこぢらを見る視線がやけに鋭いような気がするんだが……」

「ああ、セシリア・オルコットのことか。あいつは”今どきの女”だからな。気にする必要もないだろ?」

「そうか……」

カムイはそう言いつつも、入学時に全校生徒に配られた新入生の名簿から彼女の情報を引っ張り出す。

セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生で、入学時の成績も優秀。IS適正もA+であり、更に専用機持ちである。

彼女の専用ISであるブルー・ティアーズは最新型である第三世代の中距離射撃型であり、最大の特徴は固定武装の自立機動兵器であるビット”ブルー・ティアーズ”である。

実技試験で試験官を倒したと記してあることから、高いレベルで使いこなせているのは明白だろ?。

「なうほど……、まさにヒリート中のヒリートといつわけか」

「だがあの様子ではな……お前や一夏のことも許せないのでないか?」

たしかに見た限りでは、彼女のプライドは高そうだ。先ほど彼女に話しかけていた袖の長い制服を着たクラスマイトを、突っぱねている様子からもそれは伺える。

筈の言つた”今どきの女”とは、ISに乗れない男性を馬鹿にしている女性のことだ。

おそらく1年の中では一番の実力を持つている自分ではなく、男であるというだけでもわりから注目されている……、それが彼女には許せないのであらうか?

S H Rでの敵意のこもった視線も、彼女が男を見下しているからなのだろうか？

だがカムイはそつは思わなかつた。何故なら彼女のさりげない振る舞いの中に、貴族らしい気品さが見え隠れしているからだ。入学式に向かう途中で道に迷つて新入生をさりげなく助けていたのを見かけたし、今もなお彼女に向けられている視線も、S H Rでの彼の自己紹介の後から若干和らいでいる。

つまりプライドが高いといつても傲慢といつわけではなく、寧ろ礼節をわきまえ、相手の良い所は認められる潔さを持つてないと考えられる。

更に I Sに対する姿勢も評価できる。先ほどの授業での質問もすらすら答えられていたし、その説明も理論的（難しそぎて分かりづらかったが）であることから、知識は豊富なのだろう。そして自身の専用機を試験官を倒すほど操れるということは、I S適正という才能以上に努力しているといつこととは考えれば明白である。

ノブレス・オブリージュ。彼女を一言で表現するのならこの言葉しかないだろう。それだけカムイは彼女のことを評価していた。

正確にいえば彼の中に流れる”血”がそつさせているのだが、今それを語る必要はないだろう……。

（何にせよ彼女と直接話さないことには何も分からぬか……）

そう考えつつ第2幕と別れたカムイは、次の授業の準備をするために

自分の席へ戻るのであった。

だが彼女と話すどころか、それ以上の展開となることをこの時の彼には知る由もなかつた……。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

三時間田の授業はより実践的な講義といつことで、真耶ではなく千冬が教壇に立っていた。

しかし誰が教鞭を取ろうと関係ない。カムイはそう思いつつ教科書を広げようとすると千冬の一言でその手を止める。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

（クラス代表か……まあ俺には関係ないし、なれるはずもないな）

クラス代表とは文字通りクラス長のようなもので、先ほどのような対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席が義務付けられる。

当然責任感の強いものになるべきだし、対抗戦の優勝者のクラスは様々な特権が与えられることから、E.Sの実力の高さも求められる。

しかも任命されてから一年間は変更できないので、今後のことも考慮に入れつつ慎重に選出する必要性が出てくるのである。

「ちなみに自薦他薦は問わないぞ。なお選ばれたものには拒否権はないから覚悟しておけ」

（あいかわらず厳しいな。まあ少なくとも今の俺にはIRSの実力が足りてないし、選ばれる心配もないか……）

カムイの中にも、自分のIRSの実力が他と比べてどれほどのものか知りたいという欲があった。しかし自分のIRSの適性ランクは同じ男の一夏に比べて低い（一夏がBなのに対し、カムイはC）。ランクの低さを技量でカバーできればいいのだが、生身の時と違ったIRSを纏つての戦いとなると、搭乗時間が圧倒的に少ないカムイにとつてはまだ荷が重すぎた。

カムイのIRSランクの低さは生徒名簿を見れば一発で分かるし、なりより適任はすでにいるではないか。先ほど彼を見つめていた彼女になら任せられるだろう。

そう考えたカムイがセシリア・オルコットを推薦しようとした挙手しよとしたその時、

「はいっ。織斑君を推薦します  
「私は四条君が良いと思います」

どこのからか自分達を推薦する声が聞こえた。一瞬自分の耳を疑つたが、まわりも次々に賛同していることからどうやら間違いではないらしい。

そしてそれによりカムイは出鼻を挫かれ、セシリアを推薦するタイミングを逃してしまった。

「お、俺！？」

一 夏も驚愕のあまり思わず席を立つてしまつ。彼女達がどうこう意図で自分達を選んだのかは分からぬ。

だがもし興味本位で選んだのだとすれば迷惑なことこの上ない。しかも拒否権がない以上、反論の余地がない。

「織斑、席に着け、邪魔だ。さて他にはいないのか？いないのなら二人の中から……」

このままいけばクラス代表はカムイか一夏のどちらかになるだろう。カムイは席に着いた隣の一夏を見やる。

先ほどとは違つて一夏の顔には戸惑いは感じられず、すでに腹をくくつたのか、こちらを見返して軽くうなづいてきた。

（覚悟を決めたのか一夏……。ならば俺も負けていられないな。そうと決まれば……）

そしてカムイも彼に対して首肯を返そうとして……

「待つてください。納得がいきませんわ」

話の流れを遮るかのように彼女は立ち上がつた。ブロンドの長髪をたなびかせ、その仕草には気品が漂つ。

まさに優雅な英國淑女を体現したかのようなその生徒の名は……

「セシリ亞・オルコットか？」

カムイに名前を呼ばれた彼女は一瞬彼に向けるが、すぐにクラス全体に視線を戻す。

「確かに織斑さんの授業に対する姿勢は男にしては見所がありますし、四条さんの自己紹介にはわたくしも考えさせらるモノがあります。ですがそれがどうしたというのですか？　ＩＳに満足に乘れないような男を代表に選んで一年間恥をかけといふのですか？　考えられませんわね」

（なるほどよく見ているな……。だがやはりプライドがそれを許せないのか？）

彼女にも分かっているのだろう。クラス代表の責任がどれほど重大なのか。だからこそ許せないのだ。興味本位でカムイ達を選んだクラスメイトが、実績もないのに代表になろうとしているカムイ達が……

「例えて言つなら今の彼らは必死に人間の真似をしようとする猿同然ですわ。猿は猿らしくおとなしくバナナでも食べていなさい」

セシリ亞がカムイ達をそう罵倒した瞬間、一部の生徒は顔を伏せ始めた。おそらく笑いを堪えているのだろう……。

彼女はカムイや一夏がＩＳに乗る女性の猿真似をしていると言いたいのだろうが、表現がいささか稚拙ではないだろうか？

それに相手を諭すのではなく、敵意を生むかのような発言は、彼の考えていたセシリ亞の姿らしくない。

「おい！　何だその言い草は！　馬鹿にするにしても言葉を選べよ

！ 何様のつもりだ！…」

「あら、野蛮のこと……。やはり猿は怒ると喚き散らすことしか能がありませんのね」

「てめえ……」

セシリ亞の言葉を聞いて激昂した一夏が怒りをあらわにする。彼女の罵倒に憤つてているのだろう。

そして確實に教室の雰囲気は悪くなつていて。真耶はどうすればいいか分からずオロオロしているし、簞にいたつては怒りの籠つた視線をセシリ亞に向けている。

この状況の中でカムイは考えていた。セシリ亞の意図は何なのか？自分達を罵つてまで果たしたいことは何か？

千冬が一連の流れを黙認しているところを見ると、おそらく彼女には何故なのか分かつてているのだろう。

まだはつきりした訳ではないがカムイにも分かつていることがある。それを確かめるべく彼は行動を起こす。

「おい、セシリ亞・オルコット」

「何ですか四条さん。あなたはもう少し利口だと思つていたのですが……」

「そんなに俺達が怖いか？」

「……っ！？」

カムイの一言が図星をついたのか、セシリ亞は押し黙つてしまつ。その反応にカムイの予想が確信に変わる。

「確かにE.Sの知識も実力もある君の方が、クラス代表には相応しいだろうな」

「そうですね。どう考へても自他共にわたくし以外に適任はないな

いと思いますが？」

「だからこそ、自分の実力以上に俺達の存在そのものが評価されている現状を恐れているんだろう？」

セシリアの問いかけにカムイが冷静に答えていく。その答えに対し、セシリアもまた反論することなく落ち着き払っていた。  
おそらく一人とも分かっているのだ。お互いが何を考えているのかを……。

男というだけでクラス代表に推薦されたカムイ達。それだけの理由で自分の実力が評価されないセシリア。

そして彼女は恐れているのだ。ISの知識も実力も無いような連中のために、自分が否定され無視されるこの原状を。

「何をおっしゃるのかと思えば……、わたくしもずいぶん見くびられたものですわね」

「始めて馬鹿にしたのはそっちだる。代表候補生だがなんだか知らねえが、お高くとまつてんじやねえぞ」

セシリアの発言に一夏が噛み付く。彼もまた自分やカムイの決意を蔑ろにされたのが許せないのだろう。

だがセシリアはこうなる事を分かつてていたはずだ。だからこそ今もなおカムイや一夏に敵意を持たせようとしている。

「オルゴット、このままでは埒が明かない。そろそろ誰が代表にふさわしいのか、決めるべきではないか？」

「同感ですね。ここはIS学園……。ならばここにで起きた問題もISで片を付けるのが妥当でしょう」

カムイの意見にセシリアがほくそ笑みながら同意する。一人ともどのように問題を解決するべきなのか分かつていた。

カムイ達は自分達に代表が務まる事を証明したい。そしてセシリアは自分の実力を改めて示し、皆に認めてもらいたい。

ならばE.Sの実力を相手に見せ付けてやればよい。だからこそセシリアはわざと一人を煽り、戦意を持たせようとしたのだ。

「やつとあなたもやる気になつていただけましたか……。ならば今こそあなた方に決闘を申し込みますわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「仕方がないか……。俺達も覚悟した以上、逃げるわけにはいかないんだ」

セシリアの提案に、一夏とカムイは同意する。実力差は明らかだが、彼らの覚悟はその程度のことにはつみはしなかつた。

そしてここにきて千冬は口元に笑みを浮かべていた。まるでいつなるのを待ち望んでいたかのように……。

千冬は真耶に耳打ちし、何かの確認を取らせた。そして報告を受けると顔を引き締め、生徒達の方に向き直った。

「話は決まつたな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後の第三アリーナで行う。細かいルールはあとで定めるとしてそろそろ授業を始めようか」

そう言って千冬が手を付いて話を纏める。おそらく先ほどは、真耶にアリーナが使用できる日を確認させていたのだろう。

つまりあと一週間彼らに猶予があるわけだが、現状としてはかなり厳しいものがある。

何故なら彼らが相手をするのはイギリス代表候補生であり、ダメ押しと言わんばかりに専用機まで所持している。

」のような状況下で果たして彼らはどのように戦うところのだろうか……？

（どうするつもりなんだ？あいつらは……）

篠ノ乃簞は一連の流れを見て、本人達以上に動搖していた。

1年で最強の実力を持つセシリアに対しても自分を曲げなかつたカムイや一夏には感心したが、

正直なところ、簞には彼らが勝てるとは到底思えなかつた。それはまわりの女子達も同じようで、各自の表情に彼らが勝負を受けたことに対する不安、呆れなど現れていた。

簞とて彼らを信じてやりたいし、失笑や苦笑を浮かべているクラスマイトを怒鳴りつけてやりたい気持ちもあつた。

しかし圧倒的不利な状況では、そうしたところで意味はない。せめて彼らに専用機があれば……

「どうした四条。早く席に着かんか」

そのような事を簞が考えている時、千冬が未だに立つていてるカムイに注意しているのに気づいた。

その日はセシリアを見据えているように見える。

「あら、どうしたんですの？まさか今更やめたいなどと云つつもりではないでしようね？」

「さあな……、だがお前に一言だけ云つておきたいことがある

カムイの視線に気づいたセシリ亞がそう問いかける。心なしか失望しているように見える。

だが簾はあるの目を知っている。あれは何かをあきらめた目ではない。

それは幼い簾を守り、大事な事を教えてくれた時の目だった。

（そうだ……私の知ってるカムイはどんな時でも何かを諦めなかつたりはしなかった）

確かに分は悪いかもしねない。だが私にも手伝えることはあるはずだ……。

そう考えて簾は……

「撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだぜ……、セシリ亞！」

盛大にズッこけた。あいつは今なんと言つた。見るとカムイはセシリ亞を、自身の覚悟を彼女に再認識させるかのように見つめている。

その瞳には決して権力や恐怖に屈しないような力強さが籠つていた。

そんな突然のカムイの発言にまわりも呆然としている。だが一夏はまるで憧れていたヒーローを見つめるかのようにカムイを見つめていた。

（確かに今の顔はカッコいいが……って何を考えているんだ私は！

?)

そういうて雑念を振り払つかのように頭を振る。だがその雑念を抱いたのはどうやら篠だけではなかつたらし。

「あ、あなたは突然何をおっしゃつているんですかー? そんな顔をしたところで全然カツコよくなんてないだから……」

「えつ? お前何か勘違いをしてるんじゃないか? 今のは俺の覚悟を……」

カムイの顔を直視してしまつたセシリ亞も顔を紅くし、動搖を隠すかのようにカムイから顔を思い切り背けた。

宣戦布告のつもりで言つた言葉に対する予想外の反応に、カムイは訳が分からぬような顔をしている。

スカツッパパパパパパン!!!!

「うおつー?」

「お前は何時から女たらしになつたのだ」

そんなカムイを千冬の出席簿による強烈な突つ込みが襲つたのだった。

## 第三話 剣道少女と貴族少女（後書き）

気付いた方もいると思いますが、一夏君の設定が原作とは少し変わっています。早く彼らを戦わせたいのですがまだまだ先は長そうです……

#### 第四話 友の決意と真っ赤なリソバ (前書き)

今日初めて感想をいただきました。作者としてこれほどうれしい事はありません。ありがとうございます。

## 第四話 友の決意と真っ赤なリンゴ

四時間目が終わり、カムイや他のクラスメイト達は、学校にしては豪勢な食堂でランチタイムを満喫していた。

カムイは恥ずかしさからか簞の隣には座りたがらなかつたのだが、簞は一夏に日配せ（といつ名の脅迫）をするとカムイの腕を取り、そのまま彼を自分の隣に座らせてしまつた。余談だがその時の簞の顔がリンゴのように真つ赤になつっていた。

「大変なことになつちまつたな……」

口替わりランチを頬張りながら、織斑一夏は心の中で盛大にため息を吐いた。

三時間目のセシリ亞とのやり取りの後、張り切つて授業を受けたのはいいが、ついていくのがやつとだつた。

そのことを気にしながら、一夏は考える。そもそも何故自分がそこまでセシリ亞の挑発にムキになつたのかを。

一夏にはある目標があつた。それは単純であり、重い物であつた。それを決意した当初は自分に本当にそんな事ができるのか？自分でなくていいのでは？と何度も自問した。

だがISに乗れることが分かつてから、それは実現できると以前より決意が強くなつたように思えた。

高校の受験会場を間違えた時はさすがに絶望しかけたが、結果として現在のようなチャンスに恵まれている。

「だからあれは俺なりの決意表明であつて、セシリ亞を口說いたわ

けじや……」

「そう考へているのはお前だけだ！！ げ、現に私はお前の発言を  
聞いてだな……」

目の前で痴話喧嘩とも取れそうな会話をしている幼馴染達を見て、  
一夏は願う。

彼らを守れるほど強くなりたいと……

そう思つよくなつたのは小学1年のとき、篠を助けていたカム  
イを見かけたときだ。

あの時のこととは今でも心に残つてゐる。篠がいじめられている時、  
尻込みしてしまつて行動できなかつた自分と違い、彼は何の戸惑い  
も無く彼女を助けた。

思えばカムイに興味を持つたもその時だつただろつか？ 困つて  
いる人に戸惑い無く手を出せる。そんな彼がヒーローのよつに思え  
たのだ。

始めて彼を見かけたときは無口で、友達になりたくても中々きつ  
かけが掴めなかつた。

だが篠がカムイに付きまつよくなつたり、自分もそれに便乗して  
いるとい、だんだんと彼と打ち解けていくのが分かつた。

カムイは内向的だが他人を思いやることができないし、クラスメイ  
トからのいじめにも屈することはなかつた。

そんな彼に憧れ、お互に親友と呼び合つぼくの仲になるのはそ  
う時間が掛からなかつた。

第の姉である篠ノ之束がカムイに興味を持ち始めて色々やり始めた時は、一時期カムイが別人のようになってしまったこともあったが、それでも自分とカムイは強い絆で結ばれていると感じている。

だからこそくやしかった……

中学生になつてからカムイが精神的に苦しんでいるとき、自分が何もできなかつたことが……

かつて自分が誘拐されそうになつた際も彼に助けられ、守つてやると心に誓つたはずだつたのに……

結局その問題は、今は中国にいるはずの友達が解決してしまつた。だができることなら自分をもつと信用して欲しかつた。

カムイは傍にいてくれるだけで十分支えになると黙つてくれたが、一夏はそれで納得するつもりは無い。

両親がいない自分を必死で養つてくれた姉、自分を剣の道へと引き入れてくれた幼馴染、そしてそんな自分を支えてくれた親友達……

カムイの他にも守りたい、傷つけたくない人はたくさんいる。

だからこそ自分自身を鍛え、最強の兵器といわれるIISを乗りこなせるようになつて、自分を支えてくれた人達を守りたいと決意したのだ。

しかしその決意をセシリ亞・オルコットによつて間接的に罵倒された。

（確かに今の俺はまだ未熟だ……。だからこそこんなところで挫け  
るわけにはいかないんだ……）

なら証明してやろう。自分達がただ流されるままにここに来たわけ  
ではないと。例え勝てなくともベストをつくそうと……

そして……

「おい、一夏」

「何だよカムイ、俺もお前と同じく覚悟を決めていたところだつた  
のに……」

「それは結構だがまわりを見てみる」

そう親友に言われ、一夏はまわりを見てみる。そこには一夏の顔  
を見てうつとりしている大量の女子の姿があった。自分と同じテーブルで食事をしている筹や、先ほど知り合つたのほほんさん（本名  
は忘れた）含む他のクラスメイト。あげくに他のテーブルの女子やカウンターのおばちゃんまで一夏に釘つけだった。

「俺何かしたつけ？」

「お前の顔だよ。今の表情はかなりカッコよかつたぞ」

「いや、意味が分からぬんだが？」

わけがわからない状態の一夏にカムイが説明してやる。  
どうやら一夏が考え込んでいたときの表情が、まわりの女子達の  
純情な乙女心を射止めてしまつたらしく。

一夏は自分の容姿を自覚していないため、こうして無意識のうちに女性に好意を持たれるといったことが多々あるのだ。

ある人物を除いては……

「カムイ、心配するな！……お前の顔も十分カッコいいぞ

「えっ！？ あの、ありがとう……」

「い、いやこれはだな……」

不覚にも一夏の表情に見とれて動搖していた篠が、それを「まかすかのよう」にカムイにそう投げかける。

それに照れつつもお礼を言うカムイ。リア充は死ね。

自分で言つとて動搖するなよ……と心の中で突っ込みを入れつづけ一夏は思う。

これから自分達がどうなつていくかは分からぬ。だからせめて今ここにある仲間との日常だけでも守つていきたい。

こうして一夏とその親友や仲間とのランチタイムは過ぎていくのだった……

波乱もあつたが何とか無事に全ての授業が終わり、放課後となつたIS学園の廊下をカムイは一夏とともに歩いていた。

本来ならセシリヤとの決闘のルールを決めているところだったのだが、教師である千冬と真耶が緊急の用事で出払つてしまつたため、

明日へ持ち越しどとなつてしまつた。

そして今現在、カムイの手には一つの鍵が握られていた。これは自分たちが住むことになる寮の部屋の鍵である。片方は個室、もう片方は相部屋の鍵である。

これは男の I.S 操縦者が一人も発見されたということで、急な部屋割りができなかつたがための応急処置らしいのだが、問題なのは片方が女子と同棲せざるを得ない状況である。

男一人で個室または女子が個室に移動で切ればいいのだが、個室は急遽作られた物で狭く居住性も悪いため、そもそもいかないらしい。これは余談だがこれを報告する山田真耶の涙目ながらも謝るかわいらしい姿に、二人の男子は色んな意味で釘付けになつていた。

「しかしいくら部屋が変えられないからつていつても、女子と相部屋つていうのはな……」

「確かにな。お前の場合、入つた途端すぐに『ゴールインとかありそうだしな』

一夏の愚痴に、カムイが同意するように答える。一夏はその発言の意味が理解できなかつたようだが……。

つまり青春時代真つ只中の男と女が同室になると、色々な間違いが起こりうるということである。しかも場合によつては女子のほうから色仕掛けによつて迫られ、人生を棒に振る可能性もありうる。世界で一人の男性 I.S 操縦者ともなればなおさらだ。

「その点、相部屋の相手が篠かオルコットなら安心だな」

「いや、それはそれで問題だと思うが……」

「一夏の相手が」

「俺かよ！？」

カムイの発言に一夏が芸人に負けないほどのキレで突つ込みを入

れる。だがカムイの発言は的を射ていた。

筈ならば彼らを窮地に陥れるような真似はしないだろ？」、セシリアならば敵意を持つ相手に色仕掛けなどしないだろ？」、決闘を前に卑怯な手段は使わないだろ？

「これは一夏が同室ならばの話だが……

（もしカムイがあいつらの同室になつたらどうなるんだ？）

一夏は考えてみる。筈の場合は容易に想像できるが、セシリアの場合はどうなるか分からぬ。セシリアがカムイの発言であんな態度を取るのは意外だつたが、今思えばカムイの素直な発言に好意を抱いた女性は、一夏がざつと数えただけでも三、四人はいる。それが一人増えただと考へれば納得できた。

（あれ、結局どっちが相手でも問題あるんじゃね？）

「これからどうなるかを考えるのが恐ろしくなつた一夏はそこで考えるのをやめた。

廊下にいる他の女子生徒の視線を浴びつつも、寮に歩いていく二人。

そしてカムイがそろそろ鍵の分配をしようと思つたその時、不意に一個のロンゴが足元に転がってきた。

「『めんね、それ私のなの。わざわざ拾つてくれてアリガトね』

「……あなたは入学式の時の『

「へー、覚えていてくれたんだ。やっぱりワインクしてアピールした甲斐があつたかな？」

それを拾い上げたカムイに声を掛けたのは、IS学園生徒会長である更識樅無だった。

青い髪をたなびかせ、おどけながらもミステリアスな雰囲気を醸し出している彼女は、田の前の一夏だけでなくまわりの女子をも魅了していた。

誰もリンクを持っていたことに突っ込まないことはさておき、カムイは彼女を一目見た時から気付いていた。

彼女の自分に対する視線の中に単純な興味だけでなく、何かを見定めているかのようなものが含まれていることに……

（こ）人は何を探つてるんだ？ 確かに男性の操縦者、特に入学直前まで存在を隠されていた俺は珍しいかもしれないが、……？）

カムイは彼女が自分に興味を持つ理由を考えてみた。一夏とは違ひ、カムイは束の考え（彼女曰くちーちゃんやいっくんへのサプライズ）で飛び入りに近い形で入学した。そのために興味を持たれているのだろう。

彼女からの視線がそろそろ鬱陶しくなつたため、早々に話を切り上げようとする。

「まあ会長さんじきじきにあんな事をされては意識もしますよ。では寮に向かいますので俺達はこれで失礼します」

「あら、残念ね。できればもっとゆっくり話をしたかったのだけど……？」

「……それはまたの機会にお願いします。ほら一夏、はやく行くぞ」「お、おう」

カムイに促され、一夏も戸惑いつつも返事をする。わずかだがカムイの雰囲気が張り詰めているように感じたからだ。慌てて先に歩き出したカムイを追いかける。

そしてカムイが樋無の横を通り過ぎようとした時、樋無がカムイに対してつぶやいた。

「そういうえばカムイ君。あなたも今”リング”を持っているんじゃない？」

(何だつて?)

突然の樋無の発言に、カムイは一瞬どういう意味か分からなかつた。だが次の樋無の発言はとても無視できるものではなかつた。

「そう……例えばアルタイルやエツィオが持つていた”エデンの果実”とかね?」

それを聞いた瞬間、カムイは腕に隠していたナイフを彼女の腹に突きつけた。だがそれは一夏、まわりの女子からは見えていない。ほとんど体を動かさず、しかもさりげなく死角に体をずらしたた

めだ。その眼は先ほどの彼のものとは違ひ、誰もが思わず縮み上がるそつなほど冷たいものだった。

(「きなりね……そこはとほかるか無視するといいじゃないの?）

(「黙れ……。俺の正体に気が付いてるんだが…今ここで危害を加えるならお前を……）

(待ちなさい……ここで事を荒立てるのは得策ではないわ。織斑君にも見られちやうわよ）

(……)

表面上冷静でいたが、樋無は内心焦っていた。そしてカムイを侮っていたことを思い知らされる。

(「こんなことなら虚の忠告をもつれつと真面目に受け止めていれば良かったわね……）

何しろ自分ですら反応できない速度、しかもまわりに気が取られることがなく一瞬で自分を殺しにかかったのだから……

樋無としては衆目の中でカマをかけ、その反応を見よつと想つていた。そして攻撃した時に備えて準備も整えていた。

だが結果として、あらうことか自分が反応する間もなく懷に凶器を突きつけられ、何もできないでいる。そして樋無はあることを確信する。

(お互に聞きたいこともできたでしょう? 生徒会室に来なさい。

おこしい紅茶も用意してあるわ)

(「いいだろ? だが俺の秘密を少しでもバラセつとすれば消すぞ）

(「あら、怖い怖い。レティマーはあちこどいたわるものよ）

「」の10秒間たらずのやり取りの後、カムイは何が起こったのか分からずに呆然とする一夏に片方の鍵を預け、樋無の先導に従い、生徒会室へ向かうのだった。

IS学園入学初日、いきなり正体がバレそくなつて内心焦つているカムイとは裏腹に、更識樋無は歓喜していた。

（やつと見つけた……。彼こそが本物の……、更識家が追い求めていた”アサシン”に違いないわ）

はたして彼女は敵なのか、それとも味方なのか……、それは現時点では誰にも分からなかつた……

## 第四話 友の決意と真っ赤なリンク (後書き)

1月まで順調に投稿してきましたが、この先は忙つなうじやう……。  
。次の話も呼んでいただけると幸いです。

## 第五話 裏側での駆け引き（前書き）

先日のことですが活動報告なるものを書いてみました。そして今回は予定よりも早く投稿できました。あいかわらず文章構成は難しいです……。

## 第五話 裏側での駆け引き

生徒会長である楯無に連れられてやつてきた生徒会室……。下手をするとそこらの学校の校長室より豪華であろうその部屋でカムイは考えていた。

何故彼女はあのような言葉を口走ったのかを……。

アルタイル、エツィオ、そして”エデンの果実”はそれを知る者にとつては特別な意味を持つ。アルタイルは”伝説のアサシン”と呼ばれ、後世の礎となるような偉業を成し遂げたし、”最強のアサシン”であるエツィオはアサシンとして必要な様々な技を生み出していった。

この二人にはある共通点がある。それは”エデンの果実”を所持していたことである。世界に数あるアーティファクトの中でも、特に”エデンの果実”は危険なものであり、それを得た者は未来を見したり、人心掌握の術が得られるという。大抵の人間なら欲に溺れてそれを自身のために使おうとするだろうが、二人のアサシンはそれを世界の安全と平和のために使用していた。

そのことをカムイは”実際に体験していて”知っているし、純粋に尊敬していた。

だがこれらの情報を知り得るのは、世に一種類しか存在しない。”エデンの果実”を回収・破壊して世界を守るアサシン陣営、そしてもうひとつは”エデンの果実”を手に入れ、世界を我が物にしようとするテンプル騎士団である。

つまり楯無は現時点では敵か味方が分からないのだ。だから楯無

に薦められた紅茶もうかつに飲めないし、田の前でにっこりしてい  
る彼女を暗殺するわけにもいかない。

もしさサシンの仲間ならば心強いことは間違いないだろう。だが  
もしテンプル騎士団ならばその時は……。

カムイは彼女の真意を知るべく行動を起こすことにした。願わく  
ば彼女が味方であることを祈つて……

「早速聞きたいんだがお前は……」

「その前に言っておきたいことがあるわ……、私の正体をね……」

先ほどまで笑みを浮かべていた彼女が突然真剣な表情になり、そ  
う切り出す。その変わりように驚くカムイだが、注意深く彼女を観  
察する。

「どういう意味だ……？」

「生徒会長つていうのは言わば表の顔……、改めて自己紹介するわ。  
私は更識楯無……対暗部用暗部である更識家の当主よ」

「対暗部か……だが俺に何の関係がある。お前は俺の何を知つてい  
る？」

楯無の正体を知つてもカムイは動搖することなく話を進める。彼  
女が”エデンの果実”の存在を知る時点で裏の人間ということは明  
白だったからだ。そして彼女からは今のところ敵意は感じない。

「そうね……、今のところはあなたがアサシンであり、”エデンの  
果実”を持つてるかも……ってところかしらね」

「何故そう思う？」

「私の部下に調べさせたの……、あつとあらゆる手段を使ってね。

まああなたの同行者には手に負はれただけね

そう言って楯無は本当に苦労したわと言いながら微笑みかける。

対してカムイは更に警戒を強める。

彼の同行者は世界一の頭脳の持ち主であり、今まで自分の存在が外部に漏れなかつたのもその人物のおかげであるからだ。それが知られているという事は……。余計に考えることが増え、混乱しているカムイに楯無は語りかける。

「だけどそれだけの価値はあつたわ。だつてついに奴らの野望を阻止する希望が見つかつたんだもの……」

「奴ら……？」

「そう……、君や私達の平和を脅かす敵、テンプル騎士団よ

テンプル騎士団……、はるか古から存在し、世界に散らばるアーティファクトによつて新世界をつくり、それを支配するために暗躍する組織である。

アルタイルやエツィオなどのアサシンは、長年に渡り”エデンの果実”をめぐつて彼らと対決しており、その戦いは今もなお終わりを迎えてはいない。

そしてカムイにとつてもまた、テンプル騎士団との戦いは逃れられぬ宿命であるといつても過言ではないのだ。

楯無はカムイの敵であるテンプル騎士団を敵と断言した。ならば彼女の真意は何なのか？

「テンプル騎士団が敵だと……？」

「そういう事よ。私たち更識家は代々アサシン達と協力してきた。だから信じて欲しいの……。私はあなたの味方よ」

そう言つて楯無は再び微笑みかけ、左手の薬指を曲げてカムイに掲げた。その行為と彼女の真剣な表情を見たカムイは、一瞬驚いてしまつた。

左手の薬指……。それは”伝説のアサシン”であるアルタイルに欠けていたものだった。彼女の行為は、アサシンに敬意を表する証なのだ。

そして彼女の表情……。そこに悪意は感じられず、むしろ安心感すら漂わせている。自分を落としいれようとしているとは考えられなかつた。

「……それを証明する手立ては？」

「今まで私たちが手に入ってきた情報。そしてあなたのこれから行動に対する支援で示していくのはどうかしら？」

楯無の答えにカムイはどうするべきか悩んでいたが、とりあえずの結論を出すことにした。

「……分かりました。とりあえずあなたを信じます」

今までのやり取りから、少なくとも彼女が敵でないと判断した。仮にテンプル騎士団なら、カムイが一種の閉鎖空間であるEIS学園に入学する前に手を打つだろ？……。それが自分では無く”エデンの果実”を狙つていたとすればなおさらだ。

それに現状としては仲間が欲しいというのもあった。ISが普及した現在、テンプル騎士団は巨大な企業を隠れ蓑にして活動している。

巨大な規模を持つた敵に同行者を含む一人だけで相手にするのは無謀であり、勝てる見込みもなかつただろう。だが仲間が増えれば勝機も見えてくる。

しかしカムイが彼女を信じた理由はそれだけではなかつた。

「理由を聞いてもいいかしら……？　あなた、何か悩んでたでしょ？」

「……信じたいんです。こんな自分を……アサシンとしての俺を助けてくれる人たちのことを」

「えつ？」

その答えに樋無は一瞬呆然としてしまう。それはカムイの心の声だった。ある日突然アサシンとしての資質に目覚め、自分の世界がガラリと変わってしまった。

他人にできないことが出来るようになり、それを気味悪がったまわりの人間は彼に敵意を持った。まだ幼い彼がその状況に耐えられたのは、そんな自分を自分と認めてくれた家族や親友、そしてその姉たちだけだった。だからこそ彼は、自分を認めてくれる人間を切り捨てるなどできなかつた。敵でないならなおさらだ。

そんな彼の心情を悟つたかのように樋無は彼を見つめる。そして何かを思いついたか、笑みを浮かべるとおもむろに自分の左手を彼に差し出した。

「とりあえず信頼の証つてことでお願いしていいかしら？」

「俺はまだ信頼しきれないんですけどね……」

「あらら、手厳しいのね。でもあなたを信頼したいのはこちらも同じよ」

「ふつ……、違いない」

正直カムイは彼女に苦手意識を持っていた。始めて廊下で出会った時はおどけていたのに、ここではこうして真剣な顔をして向き合っている。

気がつけば警戒心が解かれ、仲間になつてもいいといつこりまで来ている。まるで彼女の手のひらで踊っているかのような感覚がした。

そのことに不快感を覚えつつ、カムイはまた彼女に同情していた。彼女もまだ成人していないのにも関わらず、当主という大役をこなしている。

そして仕事をこなすためにいくつもの顔を使い分けなければならぬ。どれが彼女の本当の顔か分からぬが、先ほどのやり取りで何か通じ合つものを得たのも確かだ。

（ならば信じてみるか……、根拠がないのが悔しいけどな）

カムイも楯無に対して自嘲気味に微笑むと、楯無の手に自分の手を重ねる。

こうして二人はがつちりと握手をしたのだった。お互いが助け合つていけることを願いながら……

握手が済み、それが終わると同時に入室してきた布仏虚の入れなおした紅茶を飲みながら、カムイは楯無と情報交換を始めた。

カムイは自分が”エデンの果実”を所持していない事を語り、楯無はこれまで更識家が得てきた情報を提供することを約束した。

楯無はカムイが”エデンの果実”を持つていない事を聞き、安心と落胆が混じったような複雑な表情をしていた。

それからは虚を交えた三人で雑談をする流れになったのだが、その時の楯無はおどけた笑みを浮かべ、時々冗談を言つてくるようになつたので、カムイが不安になつてきたのは余談である。

「しかし会長さんより布仏さんの方がよっぽど信頼できそうですよ。紅茶もおいしいし……」

「恐れ入ります。まあ会長は悪ふざけするのが生きがいみたいな人ですから……」

「ちょっと、一人ともひどいわよ。この姿端麗文部両道、おまけにエジロシア代表の私に何か問題があるとでも？」

「「あります」」

楯無の問いかけに他の二人は同様の反応をする。カムイは楯無の相手をするのは苦手だが、虚とは不思議と馬が合い、先ほどのよくなやり取りが続いている。

楯無はセンスで口元を押さえて口々口と泣き崩れているが、それがふざけていると分かつている二人はそれを無視し、紅茶を啜る。

そのおざなりな対応に、楯無は割と本気で落ち込んでいたのだが、何かを思いついたのか目をキランと輝かせる。

「そういえばカムイ君。あなた一週間後にイギリス代表候補生となりあうんでしょう？」

「ん、情報が早いですね。流石俺をストーキングしていただけのことはある」

「がびーん！？ いくら何でもその言い草はないわよ。一応あなたの先輩よ？」

「布仏さん、紅茶のおかわりお願ひします」

「そして無視！？」

まともに取り合つだけ無駄と学習したカムイは楯無をスルーする。だからいつの間にか自分が名前で呼ばれていても気にしないことにした。

自分のペースに引き込めないことに更に落ち込んだ楯無だが、まだ諦めていないのかカムイに質問を投げかける。

「でも残り一週間でビリにかかる相手とは思えないわね。ここは誰かに「一チを頼むしかないでしょうね」

「でしょうね……、誰か適任はないものでしょうか？」

「それならあなたの目の前にいるでしょ？ 先輩らしことこ見せてあげるわ」

「そう言いながら勝ち誇った顔をして自分を指差す楯無。確かに工Sロシア代表の彼女ならば適任だろつ。

「いや、俺は千冬さんに頼もうとしていたんですが……」

「ええ～、親睦を深める意味でも私に教えを乞うのが一番だと思つけどな。それに織斑先生よりあなたのことを見つけてるわ

「そ、それはそうかもしないが……」

いつの間にかカムイの隣に座った樋無がカムイの耳元でそうささやく。それと同時に漂ってくる樋無の甘い香りにカムイも若干動搖する。

しかもその時に樋無の胸が腕に当たつており、わざとと分かつていても意識してしまう。樋無はカムイの様子にしてやつたりとほくそ笑むと、話を先に進める。

「でしょ？ 私にまかせてくれれば訓練機でも勝てるようにしてあげられるわ。今のあなたには申し分ないとと思うけど？」

「確かに……。オルコット相手に無様な戦いをしたくはない」

「なら決まりね。返事はハイかYea、あとはワンでもいいわよ」

無邪気な笑みを浮かべつつそう宣言する樋無に、カムイは頭を抱える。どう考へても自分がイジられるのが分かりきっているからだ。だが千冬は忙しそうにしているため個人の用事を頼むのは憚られるし、アサシンの事を知っている彼女に教えてもらつたほうが効率がいいのは目に見えて明らかだ。

それにこれは未だに考への読めない樋無を知るいい機会ではないのか？

樋無のことを知るためには止む無し……

カムイとしてはなるべく彼女にもて遊ばれるような真似は避けたいのだが、背に腹は変えられない。

「虚、今からアリーナと訓練機は手配できるかしら？」

「どうせ会長のことだらうと思いまして抑えておきました。場所は

第三アリーナ、EISはラフアール・リヴァイヴを使用してください

「流石は虚ね。頼りになる~」

どうやら準備は万端らしい。完全に樋無のベースに飲み込まれていることに若干苛立ちを覚えるが、強くなるために贅沢は言つていられない。

だからカムイは決意する。この場は樋無を信用し、来るべき戦いに向けて刀を鍛え上げる事を……

「……では会長さん。あなたに俺の命運を預けます。よろしくお願ひまいします」  
「うん、まかされました。素直のはいいことね。じゃあ早速行きましょ」

そうこうと樋無は自分の腕をカムイの腕に絡めるよつとして、彼を立たせると無理やり立たせるとアリーナに向かって歩き出す。カムイは突然の彼女の行動にもはや驚くことも無く、呆れた顔をしてされるがままになっていた。

虚はそんな二人を若干笑みが入った顔で送り出す。

かたや笑みを浮かべて状況を楽しんでいる更識家当主、こなた状況についていけず『惑い続けるアサシン。

そこには先ほどの険悪さは感じられず、互いを仲間として認識しているかのような安らかな雰囲気が漂っているのであつた……

## 第五話 裏側での駆け引き（後書き）

今回は内容的にどうなんだね？　感想をくださった際の答えとしては説明不足かもしませんが、後々理由は判明します。多分……

## 第六話　過去から続く想い（前書き）

モジッピー 知ってるよ。今回の話では色々やっちゃつたって事。

## 第六話 過去から続く想い

IS学園学生寮。校舎にひけを取らない規模の建物であり、IS学園の生徒達はみなここで生活している。基本的には相部屋であり、二人で一部屋を使用する。  
その高級ホテル並みの豪勢さと、利便さを追求した部屋のうちのひとつでは、ある女子生徒がシャワーを浴びながら考え方をしていた。

15歳という年齢でありながら抜群のボディスタイルを持つており、引き締まった体は女性特有の柔らかさも兼ね備えている。  
そして人によつては、”エデンの果実”よりも手に取りたいであろう、二つの豊満な果実が胸に実つている。

そんな同性や異性の人間が注目するような美貌を持つた彼女が考えていたのは、彼女にとつてかけがえの無いある男の存在である。

（思えば初めて会つたときからは、ここまでの想いを抱くなど考えられなかつたな……）

シャワーから出るお湯の温もりを感じながら篠ノ之簾は想い出していた。カムイとの出会いの事を……

彼女が初めてカムイと出会つたのは、小学一年生のときだつた。

当時から篠は剣道を嗜んでおり、更に凜々しい顔立ちからか、まわりの女子と比べて目立っていた。

そのため男らしい外見や言葉遣いによって、同級生の男子からからかわれることも多かつた。

別段篠はそのこと自体は気にも留めてなかつたし、相手にするのも馬鹿馬鹿しいと思つていた。

だがあの時は違つた。篠がそうじをしている時に現れた、いつも彼女をいじめている男子数名が、髪を結わえていたリボンを強引に奪つてしまつたのだ。

別に男女と罵られても、可憐が無いなど言われてもかまわなかつたが、自分のリボンに手を出された事は彼女にとって耐え難い屈辱だつた。

（あれは昔も今も姉さんと私をつなぐ唯一のものだつたからな。）

そのリボンは篠が慕つていた姉がプレゼントしてくれた大事な物だつたのだ。篠にとってのそれはただのプレゼントという以上に、引きこもつて何かをしていることの多い姉とのつながりが感じられる、数少ない代物だつたのだ。

それをくだらない虐めのために奪われた篠は、目の前にいる男子達を激しく憎んだ。そしてもう自分に関わつてほしくないと思つた。そのためにはどうしたらいいだろうか？ 篠が考え付いたのは、彼らを痛めつけることによつて自分への恐怖を植えつけるという、暴力にまかせた解決法だつた。

自分の手には武器になりそうなほつきが握られているし、あいつらが剣道をやつていて自分に負けるはずが無い……

そう考えた篠は後のことも考えず、男子達に殺氣をこめた視線を送る。彼女の放つ雰囲気には萎縮していた男子たちだが、やがて一斉に殴りかかるうと彼女を取り囲む。

そしてけんかといつも暴力が始まろうとしたその時、カムイが現れたのだった。

（初めて会つたあいは、一目見て私たちと同世代ぐらいだらうとは分かつた。だが……）

フードを口深にかぶり、見るもの全てに恐怖をあたえそうなプレッシャーを放ちながら、突然篠の前に彼女のリボンを差し出す。驚いたのは篠だけではなく、いじめつ子の男子達も同じだ。何故なら彼は一瞬のうちにリボンをスリ取り、彼女の前に移動したのだから……

その間誰もカムイの存在に気付かなかつたこともあり、不気味に感じたいじめつ子達は、口より先に手を出すことで彼を排除しようとする。

彼は落ち着き払つた様子で男子達の攻撃をかわしていく、驚くべきことに一度も反撃しなかつた。

そして一連の様子を見ていた友人が乱入すると、いじめっ子達は捨て台詞を吐いて逃亡したのだった。

結果から言えば誰も傷つくななく篠のリボンも無事だったのだから、良い結末だったといえるだろう。

だが篠はそれに納得がいかなかつた。自分の行動が遮られて不甲斐なかつたという事もあるが、不満に思つたのは何故彼が反撃しなかつたかということだ。

始めに手を出したのは向こうの方だし、状況的に見てこちらに非はないはずだ。むしろ反撃に転じて屈服させたほうが、今後のためになるのではないか？

見たところ彼の体さばきは、素人が見ても熟練された（同年代なのにおかしいとは感じたが）ものだと分かつたし、かわすだけでなく攻めに転じたこともできたはずだ。

そのことを詰問した彼女は、カムイの表情を見て絶句することになる。

何故なら彼は悲しそうな、自分を責めるような顔をしていたからだ。

篠には訳が分からなかつた。彼は何も悪い事はしていないし、むしろけんかに勝つことは喜ばしいことではないのか？

リボンをわたして立ち去つていったカムイの背を見つめながら、  
筈は考える。だがまだ小学生になりたての彼女には、彼の表情の意味  
が理解できなかつた。

（それからだつたか？　私があいつに付きまといつになつたのは  
……）

答えが出せなかつた筈は、カムイに付きまとつになつていていた。  
彼のことを少しでも多く知りうとしたからだ。

始めてのうちは尾行しても見失うことが多かつたのだが、時が経つ  
につれて、だんだん関わる機会も増えてきた。

それは同じくカムイに興味を持つていた織斑一夏と友達になつた  
からといつこもあるし、カムイが心を開いてくれたからといつこ  
ともある。

そしてそれらの行為は、結果として彼女の内面に変化を及ぼした。  
カムイとの様々な会話や経験を通じて、自分を客観的に見ることが  
できたからこそ、ある日理由も告げずに突然失踪した姉を今でも信  
じられているし、培ってきた力に溺れることなく自分を守つていく  
ことが出来た。

（……そうだ。だからこそ今度はカムイの力に、隣に立つていて  
と思つたんだ。）

いつしか自分を助けてくれ、見守つてくれたカムイに友情以上の  
感情を抱くようになったのは、彼と離れ離れになつてからだ。

その時になつて初めて、彼という存在が自分にとってかけがえのないものへとなつているか認識できたのだ。

だからこそ今度会つたときは、自分が彼を助け、守つていきたいと誓つた。そして互いが結ばれるような関係になりたいと想つた……

幸いなことに現在カムイと付き合つている女性がいないことも判明しているし、これならば六年の空白も簡単に埋められてるだろつ。

（それに私の事もちゃんと女性として見ててくれているしな……）

篝はカムイが彼女の容姿を照れながらもほめていた時の表情を思い出し、自然と笑みを浮かべる。こみあげてくるうれしさを隠すことなど、今の篝にはできそうもない。

自分を意識してくれているのなら、カムイが自分の想いに答えてくれる可能性は十二分にあるだろう。だがこれからの中園生活によつては、カムイが他人に狙われることもあるだろう。

特にセシリア・オルコットは男としてのカムイに好意を抱いている節があるし、それ以外の女子もこれからなびいていくかもしれない。

（だが誰にも渡すものか……。カムイの隣に立つのはこの私だ）

篠は決意する。正々堂々まっすぐな方法でカムイに想いを伝え、この先の人生を一人で歩んでいくことを……

だが篠はまだ知らない。彼女よりも先にカムイへの想いを伝え、彼のパートナーとなるうとしている少女がすでにいるということを……

心身ともにほてつた体にバスタオルを巻いて浴室から出ると、不意に自室のドアが開かれた。おそらく誰かが入ってきたのだろう。おそらく自分の同室の相手だろうと篠は判断した。放課後すぐにあてがわれた自室に向かったのだが、一向に同居人がやつてくる様子は無かつた。

そのため一夏を誘つて剣道場にて汗を流していたのだ。本当ならカムイも誘いたいところだつたのだが、どこかに行つてしまつたらしい。

そして剣道場から戻つても相手が入室した痕跡がなかつたため、先にシャワーを使わせてもらつていたのだ。

そのまだ見ぬ相手に申し訳ないと想いつつ、篠は出迎えるためにドアの前へと向かつていく。

「同室のものか？ 先にシャワーを使つてしまつてしまない。私の名前は篠ノ之……ふえ！？」

篝はドアの前に立っていた人物を見て驚愕することになる。

何故なら、それが自分が先ほどまで考えていた四条カムイだったのだから……

だがカムイの様子はおかしかった。服装が男性用E-Sスーツだったのだが、その視点は篝のほうを向いているようで向いておらず、どこか別のところを見ているようだった。

そして今の篝の姿を見ても恥ずかしがるどころか、どこか嬉しそうな顔をして篝に近づいていった。その顔にいやらしさは感じられず、むしろずっと引き離されていた恋人と

久々に会えたかのようなやわらかい表情をしていた。

篝もそんな彼に違和感を覚えたが、羞恥心により頭が混乱しており思考が追いついていない。

「カ、カ、カ、カムイっ！？ お前一体何しにっ！？ ..... キ  
や！？」

そして篝が呆然としている間にカムイは彼女に近づき、なんと彼女を抱きしめてしまったのだ。どういうことなの……

（な、何だこれは！？ カムイは何を考えている！？ えつ？ 私のあごに手を添えたぞ。これはまさか……）

篝はあまりの出来事に理解が追いついていない。これから起こうりつることに体は抵抗しようとしたが、心ではありのままを受け入れようとしている。

そうしてゐる間にもカムイの顔は目前に迫つてくる。しかし篝は頬を赤らめ、潤んだ瞳でそれを見つめることしかできない。そして二人の唇が触れるまさにその瞬間……

カムイは糸の切れたマリオネットのように床に崩れ落ちるのだった。

「本当にすまなかつた！！！」の通りだ！  
「だから私は気にしていないと言つただる！」「むしろあれは……  
ええい、いいから顔を上げろ！」

篝の同室相手であるカムイが目覚めてからずつと土下座を繰り返し続け、部屋着に着替えた篝が顔を赤らめながらそれを止めるという珍事が繰り広げられていた。

カムイの説明によると、生徒会長にエレの練習でしきかれ、その時の疲労で意識が朦朧としながらも部屋へ戻つていたらしい。

篝は色々と指摘したいことがあったのだが、カムイのあちこちにあざや打撲のあとがあつたことから彼を信じ、追及はしないでおいた。

しかも肝心の自分に抱きついた理由については口を濁し、幻覚を見ていたと言い出す始末で、しまいにはアッカが、だとかマリアが、だとか訳の分からぬことをつぶやきだしたため、聞くのをあきらめた。

これらのことから篠は、カムイをとにかく休ませたほうがいいだろうと判断した。だがそんなことで彼女の気持ちはおさまらない。先ほどのやり取りで彼女の心は昂つており、積年の想いが噴出しそうになっていた。それにカムイの口から、生徒会長という単語が出てきたのも気になる。

篠も入学式に出ていたので生徒会長の美貌は把握していた。その生徒会長がカムイを狙っているのなら、早急に対処せねばならない。だから篠は攻勢に出ることにした。何事においてもつねに相手の先を読み、先制攻撃する。それは勝負においても恋愛においても重要な要素なのだ。

「……悪いと思つてゐるのなら質問に答える」

「な、何だ？ それで許してもらえるのなら何でもするぞ」

篠の突然の問いかけに、カムイは動搖しつつも真剣な顔つきで彼女の方を向く。彼女には無意識とはいへ、失礼な振る舞いをしたことに深く反省しているからだ。

だがその篠の顔が今何故かカムイの目の前にあつた。頬を赤らめながら見つめてくる彼女に、カムイの顔もまた羞恥に染まつていく。

「私を抱きしめてみてどうだった……？ 嬉しかったか？ 興奮したか？」

「幕？ お前は何を……」

「私はお前にずっと言いたいことがあつたんだ……。聞いてくれ、私はお前のことを……」

幕は瞳を潤ませ、カムイの耳元でささやくように話はじめた。今 の幕の纏う霧囲気は、男を魅了する妖美さに満ち溢れ、流石のカムイも魅了されてしまっていた。

そして幕はカムイの正面に顔を向けると、一世一代の大勝負に出よつとする。この状況、しかもカムイが自分を過剰に意識している今ならば成し遂げられる。

幕が続きの言葉を紡げりつとして……

「箒～。言ふ忘れていたことがあつたんだが……おわづ！？」

部屋のドアが突然開いたかと思つと、一夏が顔を覗かせて箒に話しかけた。だが今の部屋の状況から、自分がとんでもない場面に出くわしてしまつたことを認識した。

カムイはどこかほつとした表情を浮かべているが、箒は涙を浮かべ、羞恥の混じつた怒氣を纏つて一夏をにらみつけていた。しかも髪の毛が彼女の纏う強大なオーラによつて逆立つており、いつの間にか彼女の手には一振りの木刀が握られている。

「あ、あのお楽しみ中のといひ悪いんですが、同室の相手がカムイつてことを伝えに来ました……」

「……そつか、それはご苦労だったな……」

一夏は箒の纏つ空氣に威圧されてしまい、自然と敬語となる。だが箒はそんなことなどお構い無しに一夏の方へ歩を進めていく。

「ほ、箒さん。一体何を……？」

「お前に悪氣は無いのだろうが、これだけは言つておく……。死ねええええええ！……」

「えいやああああああああ……！」

箒は木刀を振り上げて一夏に襲い掛かり、一夏は箒の攻撃をかわしながら死に物狂いで寮内を逃亡していく。その様子をカムイは呆然と見ていることしかできなかつた。

今のカムイにできたのは、十字を切つて一夏の冥福を祈ることだけだった。

「つるさいぞ貴様ら！！！ 入学初日から私の手を煩わせるなどい度胸だな…… そんなに体がなまつているのなら私が相手をしてやる！！！」

突然、どこからか寮長である千冬の声が響き渡る。竹刀を握りながら篝たちを追いかけていく様子に、寮内は物々しい雰囲気に包まれていった。

その後、一夏、篝、千冬による不毛な追いかけっこは約一時間にわたつて行われ、二人に追いついた千冬による筆舌し難い制裁につて幕を閉じたのだった……

篝の勇気ある行動は不発に終わり、カムイに想いを伝えるまでには至らなかつた……。だが一夏が篝たちの部屋に乱入してからの様子は、他の女子生徒たちに筒抜けであり、カムイと篝は男と女の関係であるという噂が広がつたため、結果的にはある程度報われたことをここに記しておく。

## 第六話　過去から続く想い（後書き）

「ひつじひなつちやつたのかワカンナーハ（・×・）

おぬづきの方もいらっしゃると思いますが、篝ちやんの設定に原作との差異がいくつかあります。

途中からノリとイキオイで書いてしまったのですが、一応伏線をはつたつもりです……。

次回はいよいよバトルシーンに突入していきます。読んでいただければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4504y/>

---

IS CREED

2011年11月21日13時40分発行